

# ふるさと安曇野 きのうきょうあした

No.24 2021.7.22

## =満願寺展Ⅱ= 殿様と庶民の満願寺



(写真1) 現在の満願寺本堂



(写真2) 満願寺の施餓鬼で卒塔婆を受け取る (2018年)

栗尾山満願寺は伝説に彩られた寺である。千手観音の靈驗により中房嶽に住む妖賊の退治を成し遂げた坂上田村麻呂が開創したという言い伝えがある。そして和尚に折檻されて死んでしまった小僧の魂が栗尾の山中で明滅するという「満願寺のお小僧火」の怪談は、恐ろしくもまた悲しく語り継がれる。

江戸時代の後半に札所めぐりが流行すると、信濃三十三番札所の第二十六番として、また川西三十四番札所ではその第一番に数えられ、安曇平では代表的な観音霊場と位置づけられた。

昭和50年代ころまでは、盆前の8月9日になると、満願寺は新仏を迎えるために多くの参詣者で賑わったという。この寺の宗旨である真言宗以外の宗派や神葬祭の家から訪れる客もあり、地元の旧穂高町に限らず、遠くは明科地域からの参詣者もいた。当寺が安曇平でどれほど信仰を集めていたか、またその信仰圏の広さが如何ほどのものであったかを窺い知ることができるだろう。

古くから多くの人々の信仰を集めてきた満願寺。その歴史を今に伝えるのは、このような地元の人々が伝えてきた信仰の習俗と、当寺が伝えてきた古文書などの資料群である。

折しも令和2年、「満願寺展Ⅰ 描かれた満願寺とその自然」の開催を前にして「満願寺の古文書」が安曇野市有形文化財に指定された。これら

は満願寺が最も大切なものとして伝えてきた戦国時代から江戸時代までの20点あまりの古文書で、ほとんどは松本城主などの領主や権力者たちとの関わりを示している。

満願寺は「庶民」による信仰のよりどころであるとともに、「殿様」たちとの関わりも深い寺であった。してみれば満願寺は、安曇野さらには松本平の人々にとって「みんなのお寺」だったのかもしれない。豊科郷土博物館では「満願寺展Ⅰ」の開催以来、満願寺の歴史や自然環境に関わる新たな知見も発信してきた。これを機に私たちにとっての満願寺として見つめ直してみたいだろうか。

# 満願寺と「殿様」たち

## 1. 戦乱の時代の満願寺

### ●復興への望みをかける「勸進状」

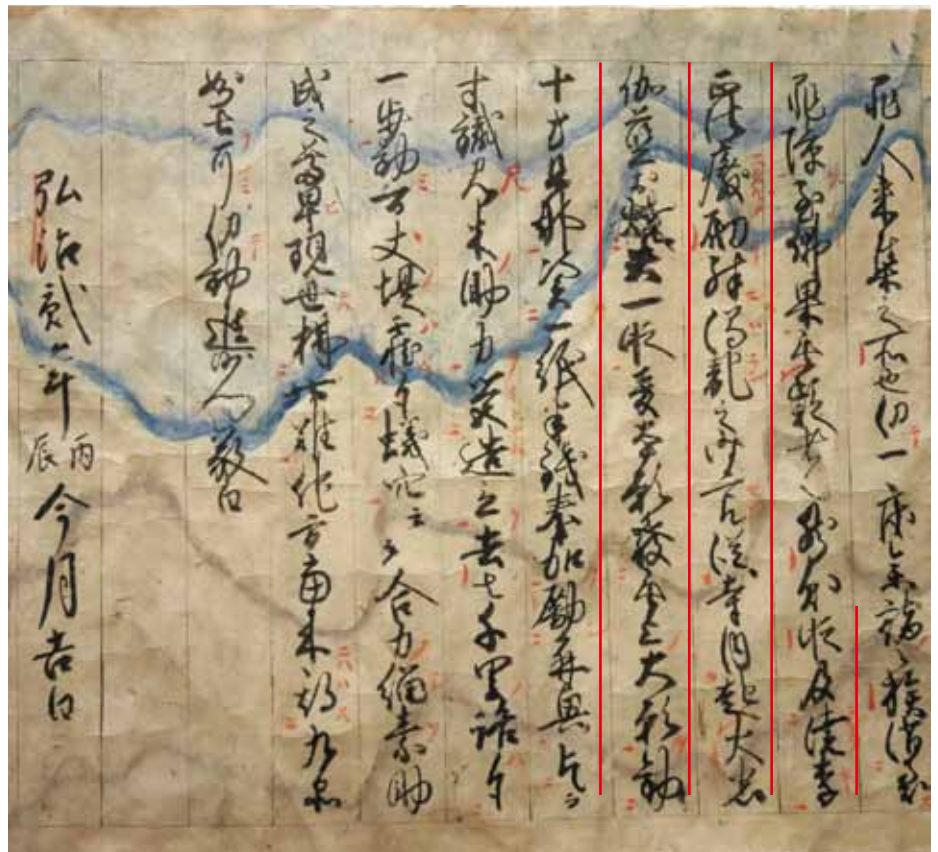
戦国時代の中ごろ、松本平は甲州の戦国大名・武田氏の侵略を受けていた。天文21年（1552）には穂高有明の小岩嶽城が攻め落とされ、500人あまりが討ち取られている。

それから4年後に書かれた弘治2年（1556）の再興勸進状（写真3）は、満願寺に残る最古の古文書である。この文書は坂上田村麻呂の開創など栗尾観音の由緒や利益から書き出されているが、要点は焼失した伽藍の復興にあった。

火災の原因は不明だが、「寺内より火起こり」とあるので、失火であろう。だが一方で、火事の原因を「<sup>しょうぼうすた</sup>正法廢るの砌、殊に末世濁乱の時節」と、仏教の正しい教えが廃れ、末法の世であり戦乱の時代にあることを嘆く文言も見える。そして後半では、寺の再興を志し、「一紙半銭の奉加」を人々に呼びかけている。このように仏教や社会貢献のために寄附を募ることを勸進という。そして「<sup>ごうりき</sup>合力」「助成」をしてくれた人々には、僧俗・貴賤を問わず、「現世には七難を払い」、来世では「九品の妙土」（浄土）が約束される、とその利益を説いて文章を結ぶ。

勸進状の筆者は「勸進沙門」と名乗るだけで署名はないが、栗尾観音の別当であった尊應という僧侶だと考えられている。

かつて存在していた観音堂には、このころに書かれた祈禱札が残されていた。残念ながら昭和21年（1946）に観音堂の火災とともに焼失したが、一志茂樹氏の論稿にはそのいくつかが記録されている。このうち尊應の名は、戦国時代の元龜2年（1571）から江戸時代初期の慶長7年（1602）までの祈禱札に見られる。これらの祈禱が何のために行われたものかはわからないが、恐らくは伽藍を再興させたいという宿願もあったのだろう。これらの活動をもって、尊應は満願寺中興第1世とされている。



（写真3）弘治2年（1556）栗尾山再興勸進状（部分）（満願寺文書）  
赤線部「時澆季に及び正法廢るの砌、寺内より火起こりて伽藍を一時に焼失す。爰に本願無上の大願を發し、十方旦那に勸めて一紙半銭の奉加を憑み再興を勵まし…」とある。

### ●天正壬午の乱のはじまり

天正10年（1582）2月、濃尾・近畿地方を掌握していた織田信長が甲信地方に出兵した。武田氏側では、木曾氏ら有力な国衆たちの寝返りもあって抗しきれず、当主・武田勝頼の自刃をもって3月11日に滅亡し

た。ここから始まる甲信地方の戦乱を、天正十年壬午みづのえうまの年に因んで「天正壬午てんしゅうじんごらんの乱」と呼ぶ。

『岩岡家記』によれば、松本平には木曾氏とともに信長の弟・源五長益ながます（のちの有楽斎うらくさい）の軍勢が進駐した。この時、安曇郡南部の岩岡、西牧、古畑らの諸氏は織田方に呼応し、現在の豊科南穂高の細萱や寺所を攻撃したという。

この事態にあたって満願寺は、織田氏きんぜいに禁制の発給を申請した。禁制とは、一定の地域内で守らねばならない掟や禁止事項を定めた文書のことである。戦闘が予想される地域にあった寺社や郷村などが、当事者となる大名などに申請して発給された禁制が多い。

「仁科郡栗尾山満願寺」に宛てられた織田氏の禁制（写真4）では、乱妨狼藉をなすこと、山林の竹木を伐採すること、箭銭（軍資金）や兵糧米を要求すること、この3ヶ条が禁止されている。

### ●本能寺の変後の信州

満願寺に残る織田氏の禁制には、「天下布武」の朱印が捺されている。「天下に武を布く」の言葉通り、天下統一を目前にしていた織田氏であったが、武田氏を下してからわずか3ヶ月後の天正10年（1582）6月、信長は家臣の謀叛により京の本能寺で自害する。

甲信地方各地には織田家中の有力な家臣が配されていたが、まだ支配が安定しておらず抵抗する勢力も少なくなかった。身の危険を感じた彼らは、自らの本国へと引き揚げていった。

これ以後の信州は、関東の北条氏、三河の徳川氏、越後の上杉氏という、近隣の戦国大名たちの勢力がせめぎ合う戦場となった。同年10月、北条氏と徳川氏の間では戦線が膠着状態となり和解する。ここに天正壬午の乱は一旦の終結をみた。だが信州では、徳川氏・上杉氏双方に属する武士たちが各地で戦闘を続けており、最終的に両氏が豊臣秀吉に臣従する天正15年（1587）までは戦乱が続くのである。

### ●小笠原氏と「栗尾観音」の再興

天正10年7月、小笠原貞慶さだよしが松本平に帰還し、安曇・筑摩両郡の支配に着手した。貞慶は、かつて武田氏によって領国を逐われた信濃守護・小笠原長時の三男である。越後や畿内など各地を転々としていたが、この時、二木氏や岩岡氏ら安曇郡南部の中小領主層に迎えられて深志城に入城し、その名を松本城と改めた。栗尾観音の本格的な再興は、この小笠原貞慶の保護下で行われた。

天正13年（1585）2月10日、小笠原氏の家臣・溝口美作守みまさかのかみが「満願寺本堂下立」があるのに未だに修理が加えられていないとして、「塚間・安曇（筑摩）」両郡（ほんしゅう）の番匠（建築を生業とする職人）たちに1人5日ずつ作業に来ることを命じている（写真5）。それでも工事が捗らなかったのか、8月6日には安筑両郡以外、つまり小笠原氏の領国以外からも大工を雇って作業させることを認める旨の文書が出された。

この「満願寺本堂」こそ、昭和21年に焼失



（写真4）天正10年織田氏禁制（満願寺文書）



（写真5）天正13年溝口氏奉書（満願寺文書）

した観音堂であると考えられる。2月10日の文書にある「下立」は、基礎のことを指すのであろうか。弘治2年以前の焼失から30年以上が経ち、ある程度は再建が始まっていたが、完成には至っていなかったようだ。

さてこの2通の文書の宛所は「満願寺」ではない。前者は「観音坊」に宛てられており、後者の文書の宛所は「栗尾観音別当」と書かれている。江戸時代の文書や棟札でも「栗尾山観音院」と書かれていたり、「満願寺」という寺名の下に「観音院」の黒印が捺されているものが見られる。

元来、満願寺は「観音院」あるいは「観音坊」を管理するために置かれた別の寺であつたらしい。前述の尊應は、別当という地位にあつた。別当とは、本来の職務がありながら、他の機関の長官も務めることを指した。この場合も同様で、尊應は満願寺の住持でありながら「栗尾観音」の「別当」も務めていたということになる。満願寺が観音堂を管理するための別当寺であるという位置づけであり、それは近世に入っても形の上では変わらなかったようだ。

## 2. 在地領主・細萱氏と満願寺

### ●山や原の權益

歴代の松本城主は、満願寺への寺領の寄進状を度々出している。これらはいずれも以前から所有していた寺領を安堵（保証）するという意味での寄進であり、領主や住持の交代などの機会に、權益が侵されないように寄進状の発給が求められたのである。

写真5の文書と同じ天正13年2月10日付で、小笠原家中の細萱河内守長知<sup>かわちのかみ</sup>が、牧の地にある「あみだ地」を「栗尾山観音寺」に寄進するという書状を出している（写真6）。また年号未詳11月28日付の文書（写真7）では、前述の細萱氏と安倍子源<sup>あべこ</sup>左衛門長弘との連署により「栗尾の内」の「原山」を「栗尾山満願寺」が所有することを追認している。安倍子氏は、天正18年（1590）に下総古河<sup>しもとうき</sup>へ移封された小笠原氏に代わって松本城に入った石川数正の家臣である。他の文書から安倍子氏の動向も勘案すると、この文書はこの天正18年かそれより少し後に出されたものと考えられる。

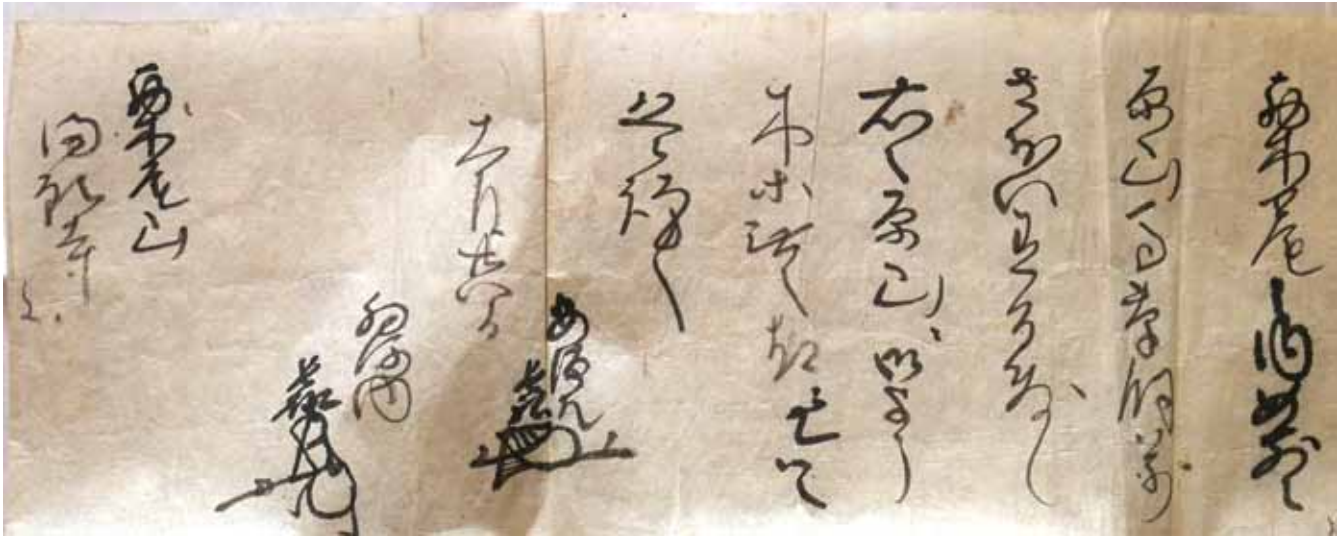
このほか年未詳の辰の年（慶長9年（1604）と思われる）8月3日付で石川家家中の鶴見治兵衛長勝から「原畑ならびに門前屋敷」について、慶長13年（1608）には石川三長（のちの康長）の名前で「牧草深の内」で「栗尾山満願寺」が所持してきた山や原畑について、それぞれ追認する文書が出されている。

なお現在は穂高牧に含まれている草深地区だが、中世、牧（猪鹿牧<sup>いがのまき</sup>）と草深は別の郷村であった。江戸



（写真6）天正13年細萱河内守書状（部分）（満願寺文書）

年月日の下に「細萱河内守長知」の名前と花押（サイン）が居えられ、左端の宛所には「栗尾山観音寺へ参」と書かれている。



(写真7) 年末詳細萱河内守・安倍子源左衛門連署書状(部分) (満願寺文書)

日付の下に「安源左(安倍子源左衛門)長弘」と「細河内(細萱河内守)長知」の名前と花押かおしが居えられており、宛所は「栗尾山観音寺参」と書かれている。

初期に「牧草深」とひとつの郷にまとめられ、その後「牧村」として明治期まで続いた。満願寺の寺領のほとんどは草深郷の内であったが、先の「あみだ地」のように牧にも飛び地があったようである。

これらの文書には、満願寺ならびに観音堂の寺領がどこなのか、ほとんど書かれていない。現在は所在不明となっているが、小笠原貞慶の後継者となった貞政(のちの秀政)が、天正17年(1589)に出した書状の写しがあった。それによれば、栗尾観音の燈明銭として「(死手山)四手山(赤嶺)」、法然堂、明嵐、草深分の原などを寄進しているという(『信濃史料』)。いずれも北の沢を挟んで満願寺の対岸にある地名である。沢の東側は観音寺領、西側は満願寺領と分けられていたのだろうか、今のところはっきりとはわからない。

### ●見えてくる在地領主・細萱氏の姿

前項で紹介した細萱氏は、中世から細萱郷(現在の豊科南穂高細萱)を拠点にしていた在地領主である。戦国時代の中ごろまでは、穂高神社の遷宮において大旦那を務めるなど、安曇郡南部で大きな影響力を持っていた。だが武田氏の時代に入ると、仁科氏の勢力に凌駕され、仁科盛信の指揮下で活動する細萱氏の姿が見える。

細萱氏が再び勢力を盛り返したのは天正10年以降、小笠原貞慶が松本城主になった後である。貞慶は安筑両郡を支配するため、周辺の領主たちを従えていったが、これに反抗した勢力には日岐氏や古厩氏などの仁科氏の一族も多かった。彼らが掃討されあるいは降伏させられ、仁科氏の勢力が弱まったところで相対的に影響力を強めたのが細萱氏だったのである。前述の天正13年の寄進状(写真6)も、細萱氏が小笠原氏の意を受けて出されたものである。

天正18年、松本城主が石川氏に交替しても、細萱氏は在地に残った。先の写真7の寄進状では、安倍子源左衛門とともに連署しているが、安倍子氏は石川氏に随従してきた家臣であって在地領主ではない。この人物は、石川氏の松本入部にあたって近隣の大名と領国の境界の確認作業も担当している。このような人物と在地領主の細萱氏が連名で文書を出したのは、新任の領主石川氏による行政を執行する担当者として、それを承認する地元の代表者という異なる立場での合意が必要であったからだろう。

だがその後、石川氏の家臣・鶴見治兵衛は単独で満願寺に寄進状を出している。また慶長18年(1613)に石川氏が改易されて小笠原秀政が松本城主に復帰すると、在地領主の権限を縮小させ、統制を強めていく。細萱氏も次第に権限を削られていったようだ。中信地域で兵農分離が進められたのは安土桃山時代から江戸時代初期にかけてであった。所領から離れて城下に集住し、俸禄を受けて生活する家臣となるか、地元の村で農民として生活するかの選択を迫られるようになったのである。その後細萱氏は帰農の道を選

んだ。地元・細萱村の富農として江戸時代を生き抜くのである。

満願寺文書からはこのように在地領主の地位が変遷する過程も垣間見ることができる。

### 3. 権力者と結びつく満願寺

#### ●松本藩主水野氏の改易と復活

正徳3年(1713)、満願寺では、<sup>ごんのだいそう ず ほういん</sup>権大僧都法印富光なる人物が、松本城主・<sup>で わのかみただちか</sup>水野出羽守忠周の除災延齢や福寿増長などを祈って七日間の祈祷を行った。水野家4代目となった忠周の代替わりに際して行われたものだが、城主の祈祷寺としての役割も果たしていたと推測される。

忠周の子で6代目藩主となった隼人正忠恒には酒乱の悪癖があり、それが原因で改易の憂き目に遭ってしまった。享保10年(1725)7月28日、忠恒は江戸城内で乱心し、長府藩主の嗣子・<sup>もんどのかみもろなり</sup>毛利主水正師就に刃傷に及んだのである。師就は負傷するも、命に別状はなかった。忠恒も切腹は免れ、後述する叔父の水野<sup>そうべ えただよし</sup>惣兵衛忠毅の家にお預けとなった。

水野家そのものの家名も存続した。忠恒の父・忠周の弟であった惣兵衛忠毅に7000石、同じく<sup>く ないただてる</sup>宮内忠照に2000石がそれぞれ佐久郡で与えられ、旗本から再出発することが許された。これには水野氏が徳川家康の生母・於大の方の実家であったこと、また水野家の分家であった水野<sup>いきのかみ</sup>壱岐守忠定が若年寄という幕府の要職にあったことが大きく影響しているといわれる。

#### ●水野家の再興

忠毅の跡を継いだ惣兵衛忠友は、幕臣としての立場が幸いし、10代将軍・家治のもとで頭角を現すようになる。明和5年(1768)には、水野家当主が代々名乗ってきた「出羽守」の官途を許され、石高も1万3000石に加増され大名となる。そして老中に次ぐ若年寄に任じられて幕政に参与した。安永6年(1777)には駿河沼津に城を築くことを命じられ、天明元年(1781)には朝廷から侍従の官職を賜った。天明5年(1785)には老中となり、幕政運営の中心に昇りつめた。忠友は自らの才覚でお家の再興を果たし、さらなる出世を遂げたのである。

忠友の跡を継いだのは養子・<sup>で わのかみただあきら</sup>出羽守忠成である。沼津などの遺領を継いだ忠成は、将軍・家斉のもとで出世を遂げる。文化14年(1817)には父・忠友同様、若年寄となり、侍従に叙せられた。ここで忠成は「沼津侍従」と名乗る。文政元年(1818)には老中に昇りつめ、権勢を揮った。

#### ●水野忠成の松本訪問

文政8年(1825)8月26日、忠成は500名以上の供を引き連れて京へ上った。往路は中山道を通り、松本城下を訪れている。松本藩主水野家の初代・忠清から5代・忠幹までが葬られている玄向寺の廟所に参詣するためである。玄向寺参詣ののち、忠成は乾瑞寺や賢忠寺といった、水野家ゆかりのほかの寺にも参詣の使者を遣わした。また水野家改易後に浪人となり松本藩領内に住んでいた者たちにも<sup>あさがみしも</sup>麻袴を着用して出迎えるようにとの指示が出されている。

忠成一行の滞在中は、松本藩・戸田家の武士や町人、近隣の



(写真8) 水野忠成の行列を記した文書  
(松本市文書館蔵・河辺文書220)

「御乗物」とあるのが水野忠成の駕籠。近習や小姓などの従者や、屋敷を本陣として提供した本町の<sup>おおなぬし</sup>大名主・倉品七郎左衛門の名前も見える。

有力者まで、出迎えや身の回りの世話、沿道の警固などに動員されている。老中とその供回りの武士たちが丁重に迎えられていたことがわかる。

その後、京で役目を済ませた忠成は、東海道を<sup>へん</sup>通って江戸へ戻っている。この途次、忠成は領国の沼津に初めて立ち寄った。そのほかにも尾張緒川の<sup>けんこんいん</sup>乾坤院、三河荻谷の<sup>りょうごんじ</sup>楞嚴寺など水野氏の先祖ゆかりの地を訪れている。

忠成にとってこの旅は、恐らく先祖である水野氏歴代の当主やその家臣たちが歩んできた道のりを再確認するとともに、改易という大きな挫折から立ち直った姿を先祖に報告し、さらに内外に宣伝する意図があったのではなかろうか。水野家に養子に入った忠成だからこそ、なおさら家への帰属意識を強めたかったのかもしれない。

### ●「沼津侍従」水野忠成と満願寺

ところで、満願寺には「沼津侍従」の手に成る揮毫が2点伝わっている。ひとつは現在の本堂に掲げられた寺号額、もうひとつは庫裡の玄関に飾られている宝珠の絵が描かれた掛軸である。ともに「沼津侍従書（または筆）」と書かれている。

これらがいつ満願寺に贈られたのかはわからないが、恐らく水野忠成の松本訪問の前後であろう。

というのも、文政8年3月、満願寺からの琉球包み2つが岡田宿を通過しているのである。宛所は水野家の勘定奉行であった中山三左衛門であった。この年の正月、満願寺では橋供養を行いたいとの願いが出され、実際に行われたようである。橋とは、現在の微妙橋のこと。明治39年（1906）に木曾の大工・瀬川伊勢松らによって架けられたことが知られているが、その前の工事は文政7年（1824）の暮れまでに行われ、翌年初めに完成を記念した法要が斎行されたということである。中山三左衛門に贈られた琉球包みは、恐らくこの竣工に関わる礼物であろう。

また後述するが、寺号額が掲げられている現在の本堂＝当時の講堂も、同じく文政年間に建築された。その屋根には明治時代にはすでに、水野氏の家紋・<sup>おもだか</sup>沢瀉が取り付けられている。講堂の建築に水野忠成が何らかの関わりを持ったことは想像に難くない。

どのような経緯があったか詳しくはわからないが、これらの資料は、満願寺と時の権力者・水野出羽守忠成との結びつきを伝えてくれる状況証拠である。

## 4. 「再中興」した満願寺

### ●十返舎一九のみた満願寺

「信州栗尾山満願寺は。大同二年。田村將軍の開基にして。本堂千手観音。そのほか如意輪堂。焰魔堂。



(写真9) 満願寺本堂の寺号額  
「沼津侍従書」とあり、「水野」の文字が見える落款が捺されている。



(写真10) 満願寺本堂の寺号額  
右側に「沼津侍従筆」と書かれ、印が捺されている。

十王堂。すべて三十六堂。藁をならべて、梁<sup>うづはり</sup>を彫<sup>ほり</sup>ものし。柱に画<sup>えが</sup>き。その結構いふばかりなし。…仁王門山門は雲<sup>そび</sup>に聳<sup>そび</sup>へ…」——『東海道中膝栗毛』の続編である『続膝栗毛』のなかで、弥次さん喜多さんに中山道を旅させた十返舎一九は、満願寺の威容をこのように描写しているが、この文章にはやや虚構が含まれている。

一九が満願寺を訪れたのは文化11年（1814）8月のこと。だがこの年の正月、満願寺で火災があり、庫裡、客殿、仁王門、山門などが焼失しているのである。住職であった第21世・良遍は再興に着手したと思われるが、文政2年（1819）、志半ばで世を去ってしまう。その後、地元・牧村の檀家惣代らに推されて第22世となったのは、小県郡長窪新町（現在の長和町長久保）の真言宗寺院・松尾山観音寺の住職であった龍賢という人物である。

### ●龍賢による満願寺の再中興

龍賢は寛政11年（1799）に観音寺の第15世となった。就任後、先代が着手した本堂の建築工事を完成させ、また境内地を拡張させたほか、京都の智積院で中性院流を学び、その法流を観音寺にもたらした。満願寺に移ったのは、文政3年（1820）の11月以降と思われる。

満願寺に入った龍賢は、講堂を建築し、文政7年には現在の微妙橋にあたる橋の工事を行った。これらの工事には老中・水野出羽守忠成から何らかの力添えがあったと考えられる。

さらに天保4年（1833）には、仁王門を再建した。この時の導師は雄山、良遍の先代で満願寺第20世にあたる。龍賢が満願寺にやって来た時、先代の良遍は亡くなっていたものの、その前に隠居していた雄山が健在であった。江戸時代後期の満願寺の再中興はこの両人が協力して成し遂げたものであろう。

### ●晩年の龍賢

弘化5年（1848）、龍賢は京都の仁和寺から色衣の着用を許される（写真11）。これは墨染の衣以外の色のついた衣を着用できるということで、衣の色が僧侶の格を表した。龍賢どれほどの地位にあったかは今後の研究課題だが、門跡寺院との関係がわかる文書として注目に値する。

同じ年、龍賢は満願寺を去り、観音寺へ戻って入寂した。改元後の嘉永元年12月28日のことであった。観音寺境内に立つ無縫塔<sup>むぼうとう</sup>には「傳燈大阿闍梨龍賢」と刻まれ、「當山御法流再傳」恐らく中性院流を伝えたことを指すのであろう、その功績が称えられている（写真12）。

満願寺に伝来する古文書からは、寺とかかわりを持ってきたその時代の「殿様」たちの姿が見えてくる。またその背後に、寺のために力を尽くしてきた僧侶たちの姿を見ることで、満願寺の歴史をより深く知ることができるだろう。

（逸見 大悟）



（写真11）仁和寺の坊官から龍賢に出された書状（満願寺文書）



（写真12）龍賢の墓（長和町・観音寺）



# 満願寺に集う人々

栗尾山満願寺は、栗尾観音の別当寺として戦国時代後半から領主の保護もあり伽藍の整備が進む。祈禱札に他国からの参拝者のものがあり、栗尾観音はすでに他国にまで知れ渡っていた。江戸時代、寺社参拝ブームが盛り上がる。19世紀前半に訪れた十返舎一九は、『続膝栗毛 八編 従木曾路善光寺道』に満願寺を紹介し、その霊験は全国的に知れ渡る。明治初年、満願寺は廃仏毀釈で廃寺となるが、観音堂は維持される。やがて満願寺は復興して、現在に続いている。「栗尾観音」には、どのような人々が集ってきたのであろう。

## 1. 観音霊場、満願寺

### (1) 信濃三十三番霊場

弘法大師1150年御遠忌記念により、西ノ河原に2mを大きくこえる「真言宗豊山派 信濃二十六番札所栗尾山満願寺」と刻まれた寺号碑が立てられている。満願寺は、信濃三十三所の観音霊場の二十六番の観音霊場である。

霊験があるとされる地、霊場を参拝して巡ることを「霊場巡礼」という。巡礼者は、霊場を一つ一つ詣ることで、自分の迷いを解き、身も心も清らかにして煩惱を取り除き、悟りを開くといわれる。

霊場巡礼は、西国三十三所が最も古く、平安時代末期から始まった。人々を救う際に三十三の姿に変化する観音菩薩の功德にすぎるため、畿内近国の33箇所の霊場寺院を巡るように室町時代に整備された。中世までは僧侶など仏教関係者が中心であったが、江戸時代になると治安の安定や経済の発展によって庶民の間にも広まっていく。しかし、霊場は遠く、広範囲に分布しており、巡礼は時間、費用とも大変であった。そこで、それぞれの土地に札所を写して、写し霊場が誕生した。関東地方では、坂東三十三所、秩父三十四所が有名である。牛伏寺（松本市）には、塩尻町、内田村の5名が百三十三番を巡礼した記念の奉納した額（1682年）が残っている。巡礼をしたのは、西国三十三所、秩父三十四所、坂東三十三所、遠く関西、関東地方の霊場へ足を伸ばし、加えて信濃三十三所も巡礼した記念である。元禄期には各地に写し霊場が広がり、案内本も発刊され、全国的な巡礼ブームとなった。巡礼者は帰郷後、記念碑として路傍や社寺の境内に供養塔を造立した。満願寺境内を始め安曇野にも数多くが残る。

信濃三十三番は、西国三十三番に見立てて17世紀後半には成立する。しかし明治維新の廃仏毀釈のなか、札所も管理する寺院や堂が代わってしまう。筑摩郡では、「信濃日光」と呼ばれた若沢寺（松本市波田）が廃寺となり、「水沢観音」は同じ波田の盛泉寺が受け継いでいる。また、長野市篠ノ井にある第



(写真13) 満願寺の寺号碑



(図1) 信濃三十三番札所（江戸時代）

(表1) 寄進者一覧表

寄進者村名	現地区	石造物数
牧	穂高	12
田中	穂高	5
岩原	堀金	3
吉野	豊科	3
上大妻	松本市梓川	3
南大妻	松本市梓川	3
青木花見	穂高	2
柏原	穂高	2
嵩下	穂高	2
富田	穂高	2
上堀金	堀金	2
下鳥羽	豊科	2
踏入	豊科	2
狐島	穂高	1
小岩嶽	穂高	1
島新田	穂高	1
塚原	穂高	1
等々力	穂高	1
橋爪	穂高	1
古厩	穂高	1
矢村	穂高	1
倉田	堀金	1
下堀金	堀金	1
飯田	豊科	1
白金	豊科	1
寺所	豊科	1
一日市場	三郷	1
二木	三郷	1
大塩	大町市八坂	1
渋田見	池田町	1
鼠穴	松川村	1
北大妻	松本市梓川	1
上神林	松本市神林	1
竹田	山形村	1
竹田本郷	山形村	1
四ヶ條大出	白馬村	1
記載なし		16
戒名等のみ		3
合計		85

八十八番 石仏寄進者地域

寄付者村名	現在	寄付者数
等々力村	穂高	5
牧村	穂高	2
柏原村	穂高	2
新田町村	豊科	1
嵩下村	穂高	1
矢原村	穂高	1
狐島村	穂高	1
岩原村	堀金	1
上堀金村	堀金	1
中堀村	堀金	1
下堀金村	堀金	1
踏入村	豊科	1
一日市場村	三郷	1
大町	大町市	1
角影村	松本市梓川	1
苅谷原	松本市四賀	1
合計		23

宝篋印塔寄進者地域 一覽

二十一番常光寺は、不思議な歴史を持っている。中山道本山宿の常光寺がキリスト教のため廃寺となった。1805年刊行の『木曾名所図会』に「観音堂 信濃巡礼所二十一番也」とあり、残った観音堂が観音霊場となる。しかし廃仏毀釈により観音堂は移され観音像は流出してしまった。その後、観音像は買い戻され長野市篠ノ井に移され現在に至っている。信濃三十三所の巡礼は、明治時代後半の交通の発達による参拝ブームによって再び盛り上がることになる。

信濃三十三所に引き続き、信濃秩父（信府三十四所）や信濃坂東（三十三所 信悟）が成立し、あわせて信濃百番の札所ができあがる。さらに郡程度の範囲で、霊場ができあがる。松本平では、筑摩三十三所、川西三十三所、仁科三十三所などが成立した。ちなみに満願寺は川西三十四所の一番札所でもある。江戸時代後期の参拝ブームの盛り上がりは観音霊場巡礼ばかりではなく、松本十二薬師霊場、信州七福神などを成立させる。

(2) 観音霊場の成立と分布

信濃三十三所の観音霊場は、客番の善光寺と北向観音を加え35寺で構成される。しかしその分布は、均等ではない。北国西街道会田宿から北、客番である規模の大きな善光寺を中心としたまとまりにみえる。中には創建も古く大きな伽藍を持つ清水寺（長野市）もある。しかし規模が小さな寺院や堂も多い。そのまとまりの西は大町街道、東は上野国から善光寺に向かう大笹街道、保科道、地蔵峠を越え松代に、同じ客番である北向観音は北国街道に沿っている。いずれも善光寺に向かう道沿いである。そこに加えられたのは、各地の著名な観音寺院である。松本平が、牛伏寺（二十七番）、若沢寺（二十五番）、それに満願寺、諏訪市の阿弥陀寺（二十四番）、伊那市の仲仙寺（二十二番）、小諸市の釈尊寺（二十九番）、修験小菅山元隆寺の本坊の一つ飯山市の菩提院（第十九番）は、いずれも各地の名刹である。ただ、今は跡形もない塩尻市本山宿の観音堂（二十一番）が加えられた理由はわからない。中山道を通り、木曾谷を抜けて信濃国への入り口という意味でもあったのか。このように水内・高井・更級・埴科郡の地域



(写真14) 四国八十八番石仏と銅製宝篋印塔

の観音霊場に、善光寺という東国随一の観音霊場を中心に据え、バランスをとるため信濃国内の著名な観音霊場を加えて三十三ヶ所が成立したのではないか。

## 2. 庶民の崇敬者たち

### (1) 四国八十八番の寄進者

人間には八十八の煩惱があり、弘法大師空海が開いたという四国霊場を八十八箇所巡ることによって煩惱が消え、願いがかなうといわれる。これが四国八十八所巡礼である。江戸時代の初めには成立し、全国から巡礼者が訪れるようになり、現在の遍路のブームにつながっている。西国三十三所もそうであるが、四国八十八所の功德をさらに身近で受けられないかと地方に写すことになる。ついには、一寺院の境内などに四国八十八所と同じ本尊と大師座像の石仏を造って並べ、一巡することで、四国八十八所を巡礼したのと同じ功德を得ようとした。

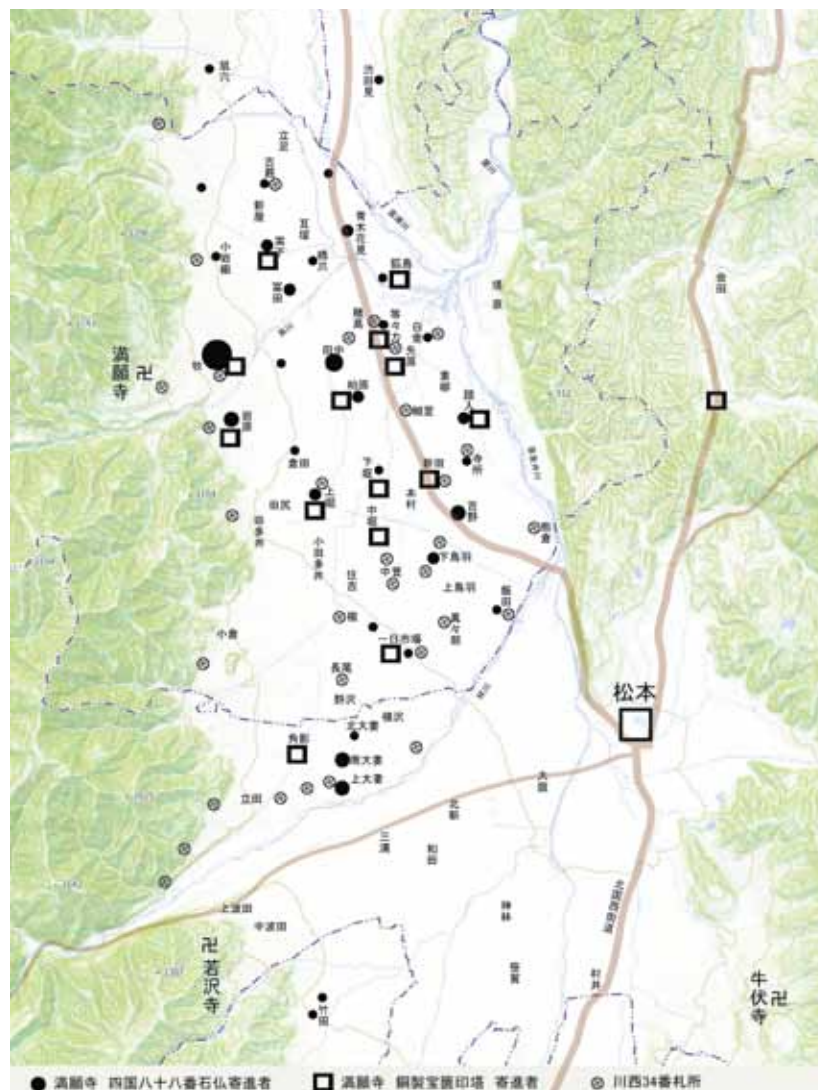
満願寺にも四国八十八所がつくられる。かつては、「信濃国栗尾山図」(1892年)にあるように、講堂からの石段、観音堂(本堂)の西側に石仏が並んでいた。現在は、仁王門から現本堂、さらに旧観音堂まで並べられているが、順番通りではない。1946年に観音堂が焼失した後に移された可能性が強く、『穂高町の石造文化財』(穂高町教育委員会 2000)に詳しく取り上げられているのでみていきたい。

石仏は、88体あったはずであるが、破損しているものも多く、3体足りない。それぞれの石仏は、各札所の本尊が彫られ、後背の石像上部に「〇〇番」と札所の番号が、左脇に札所の寺の名前が刻まれる。蓮台の下に、村名と寄進者名が刻まれる。寄進者は単独の場合もあるが、複数あるいはそれ以上の場合もある。ただし同じ村からである。また、「吉野三十人」「等々力むら」のように村名だけのものもある。そのほか、縁者の戒名等が彫られるだけのもの3体、何も台石に彫られないものが16体ある。

寄付者の出身地は表1となる。当然ではあるが地元の牧村が12体と最も多く、続いて隣接する田中の5体である。その分布は、現在松本市に含まれる旧梓川村も含め、渋田見村(池田町)も含め安曇郡南部に集中する。ただ、北は大町市八坂、白馬村大出、南は山形村まで広がっている。また、安曇郡南部ではあるが、長尾、田多井、田尻、小倉村など、空白の地域が存在する。そこには、平福寺、泉光寺、観音寺、など、満願寺と同じ真言宗の寺院が存在する。そのせいだろうか。

### (2) 銅製宝篋印塔

現在の本堂の西側に建てられる。銅造は珍しく、塔身の上に屋根型の笠を付けた宝篋印塔は江戸時代の中期以降

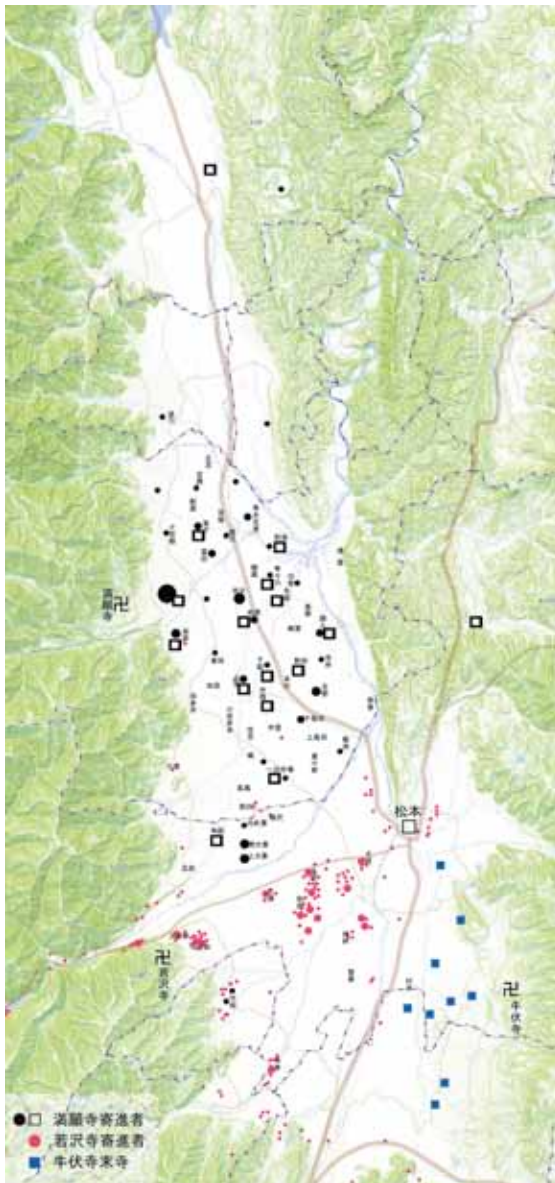


(図2) 寄進者と川西三十四番札所の分布

に流行する。台座に「安永五年丙申春三月吉辰当山十九世大僧都法印英山代」と刻まれており、1776年（安永5）に建立されていたことがわかる。塔を建てることによって、一切の罪障が消滅し、各種の災いを逃れ、極楽往生できることを願った。「信濃国栗尾山図」（1892年）には大きく描かれ、満願寺にとって重要な宗教施設であることがわかる。1895年（明治28）、同じ位置に聖天堂が建てられ、宝篋印塔が現在地に移される。台座には造営費を寄進した人々の名が村名と一緒に刻まれる。寄進者は23名、最も多いのは等々力村の5名である。四国八十八所の石仏で最も多かった地元の牧村は2名である。寄進者の分布は安曇郡の南部に集中し、八十八所の石仏とほぼ一致する。大町、刈谷原村からの寄進者は、石仏の竹田、神林、大塩村と同じように、安曇郡南部を越えたより広い範囲からの崇敬されたことを示している。安政年間（1850年代）に建てられた石灯籠の寄進者が、南は松本市村井、北は大町市、東は松本市三才山、明科の塔原まで及んでいることからわかる。

### 3. 満願寺に集う人々

満願寺の石仏や宝篋印塔の寄進者は、安曇郡南部に分布している。この範囲が「栗尾観音」に、無病息災、家内安全、五穀豊穰、商売繁盛などの個人や家の利益を願い集った人々の範囲であろう。かれらは、決して満願寺ばかりでなく、身近な寺院や堂にも手を合わせる。満願寺が一番の川西三十四所の札所の分布は、満願寺への寄進者たちの分布と重なっている。



〔図3〕満願寺・若沢寺の寄進者と牛伏寺の末寺

松本平に目を転じてみよう。信濃三十三所であった若沢寺跡に西国三十三所の石仏の寄進者名等が刻まれた台石が残っている。住職栄賢の名があるので寛政年代（1790年代）の造立である。寄進者は、住職をのぞき、地元の波田が7体、続いて和田が4体、新村2体、二子（神林）2体、島立2体、今井1体である。また1773年（安永2）のご開帳の際の寄進者は、安曇郡南部や筑摩郡南部にも及んでいる。波田地区が当然多いが、石仏と同じように和田・新村・神林も多い。その地域は、1577年（天正5）の武田勝頼、1982年の小笠原貞慶が若沢寺に寄進した範囲と一致する。中世以来の関係の深い地域である。

満願寺・若沢寺への寄進者の範囲は、梓川を挟んでやや重なるが、見事に分けられている。その範囲は、奈良井川の西岸を大きく越えることはない。そこには同じ信濃三十三ヶ所札所の牛伏寺とその末寺が存在する。このように松本平には、満願寺・若沢寺・牛伏寺の信濃三十三番札所に結びついた信仰者の範囲があった。巡礼札所は、一寺院内、郡単位、国単位と地理的に重層的に存在していたのである。信仰心を持った人々の、願い、経済的、時間的、体的にあわせて用意されたのであろう。この範囲は、決して葬儀など先祖の追善供養を行う寺院とは重ならない。

（原 明芳）

#### 参考文献

- 柿木憲二・関 保男 1991『信濃三十三札所めぐり』郷土出版社
- 牛伏寺誌刊行会 2013『牛伏寺誌』
- 波田町教育委員会 2004『若澤寺を探るⅢ 若沢寺文献資料集1』

# ホトケムカエと満願寺

## 1. ホトケムカエ

安曇野の盆は8月で、8月を盆月ともいう。盆は、死者があゝの世からこの世に帰るときである。生者は、帰って来た死者を迎え、もてなして、再びあゝの世へと送る。8月1日はイシノトといい、地獄の釜の蓋が開いて、死者がそれぞれの家に帰るために出発する。

死者が、亡くなって最初に迎える盆は特別で、松本平では新盆（アラボン）と呼ぶ。新盆の年は、満願寺へ死者を迎えに行く「ホトケムカエ」という習慣がみられる。その範囲は、現在の安曇野市域にとどまらず、北安曇郡や塩尻市などからも、ホトケムカエに大勢の参拝者が満願寺を訪れた。

### 死とはなにか

死は肉体から靈魂が離れて二度と戻らないことだと考えられていた。

死後四十九日までは、死者の靈魂が自家の屋根峰にいて、「四十九日の供養の後に墓へ行く」といわれる。とは言え、四十九日を過ぎても、死者の靈魂は、あちら側へいったきりになるわけではない。新盆はいうまでもなく、年末にも、アラミタマとしてまつられるし、毎年の盆や正月も家に迎えられてもてなされ、またあゝの世へと帰る。

### 新米の靈魂は迷子になる？

新盆では、死後間もない靈魂が、間違いなく家に帰れるように念入りに用意がされる。

満願寺へ行かれない家では、三郷の平福寺や明科の泉福寺へ行くこともあったが、多くは満願寺へホトケムカエに訪れた。ほかにも、安曇野では、高燈籠を掲げて死者が家に帰る目印にした。

幼くして亡くなった子どもがいる家では、ホトケムカエに行く習慣がなくとも、「満願寺に行けば会えるかもしれない」と迎えに行った。そうした家では、微妙橋を渡ったところにある賽の河原で、石を積んで帰った。

「帰り途を送る」といって、8月16日に再び満願寺へ参詣するところもあった。



裸電球の高燈籠 三郷南小倉（1990）長野県立歴史館提供  
8月1日には掲げる。死者が戻ってくる目印になるように出来るだけ高く掲げた。家型の燈籠が多いが、平成初めころは裸電球ということもあった。

## 2. 満願寺のホトケムカエ

満願寺は山号を栗尾山くりおさんといい、地元では「クリョウサマ」とも呼ばれる、

8月9日は、新盆のホトケムカエが行われる日で、大勢が参詣した。自家用車やバスがなかったころは、徒歩で、或いは自転車で、現在の車道ではなく、牧集落の中の栗尾道を通して参詣した。

かつて「ホトケムカエに行った」と語る人は多い。朝、暗いうちに家を出て参詣することが多かったが、遠くから参詣する場合は、本堂や村のお堂などに泊まって、お籠りをした。帰りには、



満願寺のホトケムカエと  
盆花売りの子ども（右手・1990）長野県立歴史館提供

卒塔婆を受け、子どもたちが売る盆花を買って帰った。

現在でも、この施餓鬼には、満願寺の檀家のほかに、アラボトケを迎えに訪れる人がいる。

施餓鬼の日、朝9時ころになると、檀家を中心に、施餓鬼に参加をする人々が集まりだす。

穂高矢原から来た家族は、新盆には満願寺に来るもの、と50年前に亡くなった父から言い伝えられたといい、この時は、遠縁のおばが亡くなったので、親戚と共に迎えに来たという。他の家族は、それぞれ、夫や母を迎えに、家族や親族でホトケムカエに来ており、施餓鬼の後、卒塔婆を受けて帰った。



穂高牧より満願寺方面を望む（2021）  
手前は「死出の山」と呼ばれた山。満願寺はその峰を越えた先にある。

### 安曇野の新盆

満願寺にホトケムカエに行ったり、高灯籠を掲げるだけでなく、新盆は、通常の盆より丁寧に行った。盆前の墓掃除も、新盆の家では「帰って来る仏様の足が掛からぬように」といって、家の周りなども草を取った。8月9日にはアラボトケを迎えるので、盆棚を作る。それまでに近くの山へ、ボンバナトリに行く。盆前には、親戚や近隣など、義理のある人が新盆見舞いに訪れる。身内であれば盆燈籠を贈った。盆中に、僧や神官などに経や祝詞をあげてもらう家もある。

## 3. 長野県のホトケムカエ

長野県内には、満願寺以外にもホトケムカエを行うところがある。長野市の善光寺と伊那市美篁の六道地藏尊である。

### 善光寺のお籠り（長野市）

長野市栗田や桜枝町などでは、7月31日を盂蘭盆といっ、夕方善光寺にホトケムカエに行ったという。かつては、長野市西部の山間部の人たちも善光寺へお籠りに行った。本堂に泊まり切れない人は鐘楼などにも寝泊まりした。7月31日は、夜店なども出て、大変な賑わいだった。お籠りをする人は、焼き餅を持って泊まりに行った。

現在、本堂に泊まることはできなくなり、お籠りは行われていない。



善光寺のお籠り（1990）長野県立歴史館蔵

## コラム 善光寺のお籠りの思い出

現在、穂高に暮らすKさん（1934生）は、善光寺の西、長野市西長野の新諏訪出身で、実家は旅館を営んでいた。子どものころ、「お盆は善光寺にお籠り来る人たちのオヤキを盗むのが楽しみだった」と話す。お籠りに来る人もわきまえていて盗まれる分を背負ってくる。オヤキを盗まれると、ご先祖様の供養になるといった。Kさんは、「不思議だと思うが、自分の家にいくらでもオヤキがあるのに人の家のオヤキも食べてみて、こんな味だかと思うのが楽しかった。」と話してくれた。



コロナ感染症予防のため、盆行事が行われず  
閑散とした善光寺門前（2020）

## 伊那市美篤川手の六道地蔵尊の縁日

六道地蔵尊は、伊那市東部の段丘上にあり、六道の森（杜）、六道の辻とも呼ばれている。六道の森は、周囲を田畑に囲まれており、段丘上に上がると、こんもりとした森が遠くからでもよく見える。

かつて、新盆の家では「霊（タマ）迎え」といって、8月6日には必ず参拝することになっていた。お参りの際、付近の松の枝を折って腰に差した。この松のホエ（新梢）に、アラミタマがついて家へ行くと言われており、遠く塩尻市などからもお参りに訪れたという。

現在も、縁日の早暁に、大勢の人がアラボトケを迎えに訪れる。縁日の運営は、区の役員と地元の老人クラブ会員で行なっており、老人クラブは、上川手地区と下川手地区が一年交替で行っている。供物や花などは、すべて会員が持ち寄っている。

ホトケムカエには、家族や親族で来る。地蔵尊に参拝し、続いて地蔵堂に隣接した賽の河原で小石を積み、水子地蔵にもお参りをする。地蔵尊のお札などを買って求め、境内の露店で菓子などを土産に買って帰途につくのが習わしである。

## 4. 靈魂のゆくえ

死後、死者の靈魂が行く、といわれる山は日本各地にある。青森県南部の恐山、富山県立山など、よく知られた霊山だけでなく、盆前に近くの山に死者を迎えに行ったという伝承のある地域は多い。ここでは、山形県庄内地方の「モリ供養」と香川県西北部の「イヤダニマイリ」を紹介する。

### モリ供養（もり・もりのやま・亡霊供養・亡利の山）

山形県庄内地方では、8月23日は死者がモリに集まるというので、参詣に行く。「もり」・「もりの



六道の森を北から望む（2020）



六道地蔵尊の堂と賽の河原（右手奥・2020）

かつては、「あだし野の原」と言われたこともある。六道は仏教の六道輪廻のことであるし、あだし野は、京都化野のことが想起される。どちらも、死者の行くところである。



地蔵尊にお参りする参拝者（2020）

やま」は、死者の霊がこもる霊地をいう。

鶴岡市清水の三森山は、モリ供養が行われている地域のひとつ。参道に沿って、七つの堂があり、参道の近くには、血の池や地獄穴もある。昭和30年頃までは、供養の日には、まだ明けきらぬ中を、提灯を持った参詣者が列をなして登った。

現在は、8月22日・23日が供養の日で、観音堂・仲堂（勢至堂）・阿弥陀堂で施餓鬼が行われる。施餓鬼は、それぞれ管理する寺が行うが、集落の人々も役を負う。子どもたちは「もりのやっこ」と称し、無縁仏への供養として参詣人から米や銭の施しを受ける。

三森山のほかにも、40を越える寺や神社、地域でモリ供養が行われている。

### イヤダニマイリ（カミオサメ）

香川県西北部の沿岸部や島嶼部では、イヤダニマイリやカミオサメと称して、死者の死後3日目、7日目、四十九日、一周忌、春秋の彼岸の中日、弥谷寺のお水祭りの日などに弥谷寺のある弥谷山に登る習俗があった。

荘内半島では死者の髪と棺へ掛けた着物とを持って行く。近い肉親が4・6・8人と、偶数で参る。埋め墓（参り墓とは別に死者を埋葬するだけの墓）へ行って「イヤダニへ参るぞ」と声をかけてから、背負うまねをし、そのまま8km程を歩いて弥谷山へ行く。弥谷山のオハカダニ（比丘尼谷）には洞穴があり、そこで髪をおさめる。そして、水場で戒名を書いてもらった経木しきみに櫛の枝で水をかけ、寺へ着物を納める。

お参りに行った留守中、喪家の者は墓へ行って竹で棚を作って棚を吊るし、白糸を通した針を刺した布をつっておく。お参りから帰ってきた者は、まず墓へ行く。鍬を逆手に持って棚を壊した後、あとを振り返らずに喪家へ行き、そこでそろって本膳につく。また、お参り後は山麓の茶店で食事をし、あとを振り返ってはいけないという地域もある。

イヤダニマイリは、現在ではほとんど行われていない。

### ホトケムカエとはなにか

四十九日の供養を終えた死者の魂は、そう遠くない寺や山、森などに向かい、そこにしばらく留まっている。そうした伝承は日本各地で伝えられている。

亡くなったばかりの新しい靈魂は頼りなく、自分がどこへ向かうのか、また盆になってどこへ帰っていいのかわからないのではないかと、生者は考えた。そのため、盆になると、死者が留まるとされるところへ迎えに行ったり、高燈籠などの目印を高く掲げなければ、家に帰って来られないと考えたのだろう。死者を悼み、死者を思う生者の気持ちが、ホトケムカエというかたちに表れたのであろう。ホトケムカエが、寺の行事として行われるのは、寺でも、そうした人々の思いに応えたのかもしれない。

こんにち、各地に伝えられたホトケムカエは、寺と死者を思う人々とが作り上げたものである。

（宮本 尚子）



三森山全景（山形県提供）  
標高120m程の小高い山で、頂きからは山麓の村のようすが広く見渡せる



もりのやっこ（山形県提供）  
参詣者は持って来た食べ物や供物は持ち帰ってはならず、子どもたちに施しをすると、無縁仏への供養になるという。

「ふるさと安曇野 きょう きょう あした No.24」  
編集 安曇野市豊科郷土博物館  
発行日 令和3年7月22日  
安曇野市豊科郷土博物館  
〒399-8205長野県安曇野市豊科4289-8  
TEL：0263-72-5672 / FAX：0263-72-7772  
URL：https://www.city.azumino.nagano.jp/site/museum/